

12 バルト家王子の歌

A.D. 395

- 豎琴弾きは広大なドナウ川を渡り
西ゴート族の王アラリックの館^{やかた}にやってきて
王とその勇敢な兵士たちに
バルト家の王子の歌をうたった
- バルト家の老いた王と若き王子が 5
コーランドから出立^{しゅったつ}した様をうたった
兜には王家の紋章の象の鼻
手には王家の槍
- 彼らテューリンガー地方の位高きものも兵^{つわもの}も
一団となって誇り高く馬で駆けた 10
偉大なローマ皇帝と会うため
黒海のそばのビザンツへ駆けた
- 広大なドナウ川にたどり着き
対岸^{たいおんじょう}から大音声
「ここへ来い ローマの奴隷になりさがったものども 15
おまえたちの族長を舟で渡せ」
- 瀟洒^{しょうしゃ}で高い塔をもつ
ハドリアヌス帝ゆかりの町にたどり着き
「出て来い ローマに降^{くだ}った腰抜けども 20
おまえたちの族長の馬上の勇姿を見よ」
- 一団が黒海とマルマラ海をまたぐ土地に築かれた
長い長い城壁に着いたとき
老バルト王は顔を伏せ
物思いに沈んだ
- 「これまでは攻めあぐねたフリティゲルンを嘲笑^{わら}ったが 25
これからは決してばかにはすまい
この岸辺の町ミックルガードことイスタンブールの
敵を阻む城壁がこれほどのものだったとは」

- その時 偉大なローマ皇帝が
二万の家臣を従えて現れた 30
テューリングー人は勇猛果敢
いまさら故郷に戻ろうとは夢思わぬ
- 「頭^ずが高い 反逆者よ 老いたアタナリックよ
今日は命請いをするのだ
ローマ皇帝こそ全世界を治めるもの 35
それを否と言うものなどおりはせぬ」
- 「コーランドからやってきたのは
命乞いにでも 命を捨てにでもない
ここミックルガードの岸辺の
偉大なローマ皇帝の栄華の証を見るためだ 40
- コーランドからやってきたのは
頭を下げるためではない
偉大なローマ皇帝と親交を結ぶため
神よ わしの権利を護りたまえ」
- 奸智に長けたローマ皇帝はアタナリックの手を握り 45
恭^{うやうや}しく接吻し
アタナリックと馬を並べて
豪華な町を見せて回った
- ローマ皇帝が見せたのは白い大理石の城壁
頭上高く輝き 一マイルも延びていた 50
老バルト王は言った 「この庭に飛び込むものは
英雄ジークフリード王の戦利品を手に入れるも同じ」
- ローマ皇帝が見せたのは算術の機械
炎吹き上げる井戸
石を飛ばす仕掛け 55
敵からその城壁を守るもの
- ローマ皇帝が見せたのはいくつもの寺院と尖塔
背の高い家並みが連なる通り
見張り櫓では 占星術師たちが
星座を読み解いている 60

ローマ皇帝が見せたのは百ものオールを備えた船
その舷側はそそり立つ城壁のよう
ローマ皇帝の意のままに
世界中の略奪品を持ち帰る

ローマ皇帝が見せたのはあらゆる言葉をあやつる人々 65
皆この太陽の下に生まれたものたち
人々がミックルガードの通りにひしめく様は
小川がひとつの大河に注ぐがごとし

ローマ皇帝が見せたのは陶器を扱う店々 70
絹や薄絹を商う店々
大浴場に
高いアーチを流れる水道

ローマ皇帝が見せたのはダチョウにユニコーン
猿に獅子に目つき鋭い虎
賢い象たちは「ローマ皇帝 万歳」と吠えた 75
その様はまるで前世はキリスト教徒のようだった

ローマ皇帝が見せたのは竜と^{トロール}巨人の宝物
珍しい宝石に^{きん}黄金の山
「老いた王よ その長い人生で
こんなものを見たことがあるか」 80

奸智に長けたローマ皇帝は賢い学者でもあり
呪術にも長けていた
魔法をかけられた老バルト王は
低く弱々しい声で呟いた

「ミックルガードの噂は聞いてはいたが 85
行商人の^{ほろ}法螺だと思っておった
今こそ この目でしかと見た
ミックルガードのありさまを

ヴァルハラ神殿に住まうのは神ウオドン
だがここに住まうのは 地上の神のローマ皇帝 90
あえてローマ皇帝に逆らうものは
生命を危険に晒すに等しい」

その時 老バルト王の右手で馬を進めていた

バルト家の王子が言った
「フリディゲルンは嘘つきのローマ東帝ウァレンスを殺害
その死に様はあなた様やわたしも同じ」 95

「老バルト王の右手で馬を進める
勇気ある少年よ 名を何という」
「わたしこそバルト家の王の息子 アラリック
あなた様と同じく善良なもの」 100

「わしほども善良だとほざいたな 勇気ある少年よ
顎にまだ産毛しか蓄えぬのにか」
「魔女が運命を予言したのです
わたしがあなた様の最良の領地を勝ち取ると」

「おまえがそれほど獰猛なのか 狼の子よ 105
歯も生え揃わぬのにか
ならば 二人の息子を護らねばならん
二人が領地を失わぬよう」

「二人の幼いご子息をお護りするのはこのわたし
海^{うみ}の側^{そば}の彼らの町で 110
お二人に忠実なのはこのわたし
彼らがわたしに忠実ならば

「二人の幼いご子息に忠告なさるのはあなた様
厳しく躰^{しづけ}るのはあなた様
お二人が邪悪な皇帝となられた時には 115
絞首刑にされましょう」

バルト家の一団はローマ皇帝の宮殿へ行き
美味しい孔雀を味わった
ローマ皇帝の宮殿へ行き
美味しいギリシャワインを堪能した 120

ローマ皇帝は老バルト王と二人きりで
杉のテーブルについた
彼らの周りで膝をついて仕えるのは
たくさんのローマの貴族たち

「何がそちを苦しめる 我が友 アタナリックよ 125
なぜ顔色が優れぬのだ」

「毒を盛ったな 奸智に長けたローマ皇帝よ
信頼の琴線も切れてしまった

馬の首にかけて誓った
あの大きいなる決意に従っておれば 130
この生命尽きるまで
ローマの地へ足を踏み入れることはなかったはず

コーカランドに留まって
豎琴弾きが吟ずるを聞き
栗色に熟したエール酒を飲んでおればよかったものを 135
たとえ金の指輪は手放しても

コーカランドに留まって
ゴート族の角笛を聞き
荷馬車と茶色の雌馬たちと
生まれたテントを護っておればよかったものを 140

四方を石壁に囲まれた今がわしの最期の時
海の側のビザンツで
バルト家の王子に礼を尽してくれるなら
神もそなたに情けをかけよう」

ローマ皇帝は誓いをたてて罪を浄め 145
老バルト王を手厚く葬った
墓の上には黄金の偶像を建て
全てのローマ人を 跪かせた

今やゴート族はローマ皇帝に従い
槍と剣とで護衛した 150
バルト家王子は義理の息子となり
ローマ皇帝と食をともにした

ローマ皇帝の二人の息子は色白の怠け者
教師も杖で打ちすえるほど
だが バルト家王子を打つものは 155
二度とミサは歌えぬさだめ

ローマの城門は 外は鋼鉄
中は黄金
顎にまだ産毛しか蓄えぬ

バルト家王子は出入り自由

160

ローマ皇帝の花の領土は

ローマとイタリア

だが バルト家王子がひとたび槍を持ったなら

やがては彼のものとなる

ローマの戦利品を分けるとき

165

この歌にバルト家王子が捧げるものは

女でも土地でも宝石でも黄金きんでもなく

ほんの一杯のイタリアワイン それでよし

(中島久代 訳)